

# 齋藤修一郎と英学②—大学南校から開成学校時代—

## (1) 大学南校時代

日本英学史学会本部例会第 520 回 2018 年 4 月 7 日

川瀬健一

### ●はじめに：

齋藤修一郎は、明治3年3月(1870年4月)に旧幕府・静岡藩の西洋式学校・沼津兵学校附属小学校に留学し、ここで夏頃から英語の初歩を学び始めたが、10月、福井藩選出の貢進生として東京の大学南校(後開成学校、後の東京大学)に学ぶこととなる。これは藩選出の貢進生2名の一人に選ばれたことを意味し、東京への転学は「藩命」であった。以後彼は、1875年(明治8年)7月に開成学校法科1年を終了した後に、8月に日本を經つてアメリカ・ボストン大学法科学校に留学するまで、東京でアメリカ人やイギリス人の教師たちから英語で西洋の諸学を学んだ。しかしこの時期の学校はしばしば学名校名やその制度的あり方が変化したためか(関東大震災で東大図書館が焼失したせいかな)、史料が散逸していて、その学習の実態はいまだ不明の部分が多い。

本報告は、少ない史料に依拠した先学たちの研究に基づき、私自身が見つけた史料で補足して注<sup>1</sup>、齋藤修一郎が5年近くの年月東京の学校にて、どのようなことを学んだのかについての、概括的報告である。

内容が多岐に渡るので、第一回として神田一橋に置かれた「大学南校」の状況を報告する。

### 1：出京の事情

- ・福井藩貢進生二人の一人として東京の大学南校へ。
- ・※もう一人は：仙石喜萬太(明治五年四月から八月の南校名簿にすでに名前なし。大学南校⇒南校への再編時にすでに脱落か?：「懐旧談」によると再編時に選にもれ、⇒工部大学に移り鉾山学を修める。九州炭鉾の技師長・明治40年当時)
- ・史料：注<sup>2</sup>

(福井藩人事記録「元陪臣」) 齋藤修一郎： 明治三年閏十月五日、今般南校より御達之儀ニ付、右為御用東京江可罷越事 但沼津より出東、十一月六日西周江引移
--

※明治3年閏10月5日(1870年11月27日)

明治3年11月6日(1870年12月27日)

※福井本藩の藩士ではなく、元家老本多家家臣(陪臣)から、しかも修一郎の叔父・大雲蘭溪は武生騒動注<sup>3</sup>の責任者の一人として獄中に。本藩に弓引いた「支藩」の「犯罪者」甥をなぜ選んだか?

<sup>1</sup> 基本史料である『文部省往復』は東京大学文書館サイトで全面公開されている。

<https://www.u-tokyo.ac.jp/history/S0001.html>

<sup>2</sup> 『越前市史資料編14 武生騒動』2010年刊より。

<sup>3</sup> 明治3年8月7日。本多家家格回復を新政府に陳情した府中町民が逮捕され福井に護送される途次を府中町民が奪い返そうとし、福井藩民政寮出張所などを焼き討ちした事件。蘭溪は11月5日獄死。

## 2：学校の変遷

齋藤が学んだ学校は次のように変遷した。

大学南校⇒南校⇒東京第一番中学⇒開成学校 ※名称が変わるとともに制度も変化

### ① 大学南校：明治三年正月に「開成学校」から改称。⇒明治四年七月 21 日（1871 年 9 月 5 日）

明治 3 年 2 月 19 日（1870 年 3 月 20 日）：大学規則制定

※神田一橋御門外（現在の千代田区神田錦町 3 丁目）護持院ケ原・三番火除地（現在の  
一ツ橋講堂・如水会館の白山通りを挟んだ東側の地）※補足資料を参照

**A: 当初の制度は洋学と漢学を組み合わせたもので、洋学を学ぶ学生は以下の 3 つの学校に通って学ぶ。**

※・講習所：専門学科の教授：地理・歴史・物理など

・伝習所：英語・仏語の語学修得

・数学所：西洋数学の教習

**B：貢進生制度の設置：明治 3 年 7 月 27 日（1870 年 8 月 23 日）の太政官布告**

⇒**学制改革** 明治 3 年閏 10 月（1870 年 11 月） 大学南校規則を制定

※貢進生は洋学撰修。英語・仏語・独語を選択。 全員寄宿舎生活と定められる。

310 名。うち英語履修者：219 名。仏語 74 名。独語 17 名。

貢進生を派遣した藩：259 藩/261 藩中

※★学費：貢進生の学費は各藩負担。他は藩費もしくは私費。貢進生選挙心得には、月に金 10  
両。他に書籍代が年に 50 両ほど。都合 170 両（今の金額ではおよそ 170 万円）。

※貢進生は基本的に全員寄宿舎生活 注<sup>4</sup>。明治 3 年 10 月頃（1870 年 11 月ごろ）そろそろ

### C：貢進生の中の主な者（英学専攻者のみ）

- ・長谷川芳之助(1855-：佐賀県：官費：唐津藩貢進生：文部省第一回貸費留学生、コロンビア大学にて鉱山学を修める。
- ・原口要(1851-1927)：長崎県：官費：島原藩貢進生⇒明治 6 年 7 月開成学校理科本科四級:文部省第一回貸費留学生、アメリカニューヨーク州のレンセレー工学校卒。鉄道庁技師長として全国の鉄道建設を主導。
- ・伊澤修二(1851-1917)：筑摩県：官費：高遠藩貢進生：第一番中学幹事となり後文部省へ出仕。のち師範学校校長となり、明治 8 年「師範学課取り調べ」のためアメリカ留学。ブリッジウォーター師範学校・ハーバード大学に学ぶ。帰国後、普通教育・師範教育・音楽教育の確立に尽力。
- ・小村寿太郎(1855-1911)：都城県：官費：飢肥藩貢進生：文部省第一回貸費留学生、ハーバード大学法科卒。大審院判事・後外務省に転じ、在清国公使館一等書記官を経て外務省政策局長・次官・アメリカ駐在公使・ロシア駐在公使を経て外務大臣。
- ・三浦(鳩山)和夫(1856-1911)：北条県：官費：真島藩貢進生：文部省第一回貸費留学生、コロンビア大学・エール大学卒。法学博士。東大法科教授・改進黨代議士・外務次官・衆議院議長など歴任。

---

<sup>4</sup> 当時の寄宿舎は二人で八畳又は六畳の間を使用。その一間の両側にある押入れの上段が各人の書斎となっていた（「大学学生溯源」80 貢進生時代の寄宿舎 明治 43 年 5 月 20 日東京日日新聞）。旧藩邸の長屋か？ 豊津藩小笠原家の旧藩邸ではないか？※補足資料を参照

- ・杉浦重剛(1855-1924)：滋賀県：官費：膳所藩貢進生⇒明治6年7月開成学校理科本科四級:文部省第二回貸費留学生、イギリス、サイレンスター農学校・マンチェスターのオーエンスカレッジ・ロンドンのケンジントン大で農学・化学を学ぶ。東京大学予備門長を皮切りに教育に携わり、東京文學院・国学院・皇典講究所・日本中学の設立に携わるとともに、私塾好み塾でも人材を養成。雑誌日本人、新聞日本の発刊に加わり、欧化主義に立つ条約改正にも反対し、欧化に偏らず日本の長所を重視することを説く。
- ・入江(穂積) 陳重(1855-1926)：愛媛県：官費：宇和島藩貢進生:文部省第二回貸費留学生、ロンドンのミドル・テンプル法曹院卒。のち東大法科教授。民法典を編纂。
- ・岡村輝彦(1855-1916)：木更津県：官費：鶴舞藩貢進生:文部省第二回貸費留学生、キングス・カレッジ大卒。大審院判事・東大法科講師など歴任、後弁護士。英吉利法学校を設立し後に中央大学学長。
- ・谷口直貞(1855-?)：奈良県：官費：郡山藩貢進生 ⇒明治6年7月開成学校理科本科四級:文部省第二回貸費留学生、グラスゴー大学卒。のち東大工科大学教授。後に総長。理化学研究所初代副所長。貴族院議員。帝国学士院院長。
- ・衣斐絃太郎 (関谷清景)(1855-1896)：岐阜県：官費：大垣藩貢進生⇒明治6年7月開成学校理科本科四級:文部省第二回貸費留学生、ロンドン大学に学ぶ。東大地震学教授。
- ・久原躬絃(1855-1919)：北条県：官費：津山藩貢進生：明治10年東大卒。明治12年以後、アメリカ、ジョンポプキンズ大・エール大で学び化学学位取得。後京都帝大理工科教授、後学長。

D：学課：普通科と専門科にわかれ、普通科を終えたものが専門科に進級。

- ※・普通科：初等 綴字・習字・単語会話（ベランシュー人名）・数学（加減乗除）
- 八等 文典（英クワッケンボス小）・会話・書取・数学（分数比例）
- 七等 文典（英クワッケンボス大）・地理（英ゴールドスミット）・翻訳（和文を英文に翻訳す）・数学（開平開立）
- 六等 万国史（英ウィルソン）・作文・代数
- 五等 窮理書（英クワッケンボス）・東讀・幾何学

実際はもっと細かく学力に応じてクラス分けされていた。学力で上下二つにわけ、それぞれを25名ずつのクラスに。上等は午前・午後2時間の何れかを語学演習とし、何れかを数学と素読（英文を読むだけか？）を履修した（「大学南校上等正則生日課表」『東京大学百年史 通史1』（1984年刊）p163）。英語：18級。定期試験：春秋二度（修一郎『懐旧談』による）

- ・専門科：法科・理科・文科 4等から1等まで。注<sup>5</sup>

すべては実施できず 明治3年4月では12名が三等に在学。フルベッキが語学を担当。日本人教官が二三人毎に専門学科を教授。

## E：外国語学習

「貢進生は全員外国人教師の授業を受ける正則学に編入された」と『東京大学百年史 通史1』の

<sup>5</sup> 『東京大学百年史 通史1』（1984年刊）p155～ 「大学南校の学科と諸規則」による

P146 には書かれているが、これは当時制定された「大学南校規則」の規定であって、実際は、最初は変則（日本人教師が教える）で後に正則（外国人教師が教える）となったのではないだろうか。注<sup>6</sup>

※小村寿太郎英文自伝による 原文は⇒資料1：「小村英文自伝部分」参照

その頃の教え方や学習方法は現在とは全く違ったものだった。授業はたいてい日本人の教師によってなされ、週に1・2回だけ英国と米国の教師によるリーディングの授業があった。生徒の主に勉強することは、英語を日本語に訳したりテキストの内容を理解したりすることであった。こうした学習は不完全で改善の必要があった。重要な改革は徐々に進み、変則と呼ばれていた古い学習法に対して、正則という名で外国の大学のカリキュラムが導入された（注：1871年明治4年のことだと自伝に注記あり）

## F：変則から正則へ変更になったのはいつか？

### 1：外国人教師の採用状況から見ると

・・・資料2：「開成学校・大学南校・南校外国人教師一覧」参照

※明治3年10月（1870年11月）～明治4年3月（1871年4月20日）に急に英語教師が増えている【10月以前は4人。10月から12月に3人増員で7人。このうちのダラスとリング注<sup>7</sup>が明治3年12月（1871年1月21日～）に退職。明治4年1月～3月の英語教師7人補充し12人としたのは、辞めた二人の補充とは考えられない】。

明治4年9月に南校となり完全正則制の語学学校に改正された際の教師増員願いには、生徒30人に一人の割合で教師が必要なので、250人の英学生にたして英語教師8名、各125人の仏・独生に対して仏・独語教師各4名と算出して、不足する仏・独語教師の各1名増員願いを出している。「資料3：教師雇い入れ関係文書」参照

これを基準とすれば、明治3年10月に貢進生の英学生219名入学時点で最低7人英語教師が必要で、貢進生以外にも寄宿生で英学専攻はいたはずなので、4人の英語教師では正則は不可能。したがって、10月には正則にしたいとも英語教師が不足したので当面変則とし、以後順次増員が実現した段階で、つまり明治3年閏10月（1870年11月23日）以降から明治4年3月（1871年4月20日）に順次正則に移行したか？

### 2：この時期来日した教師・グリフィスの日記からみると・・・

※『グリフィスと福井』（山下英一著 1979年福井郷土文庫）の24pには、1871年1月3日（明治3年11月13日）から2月16日（12月27日）のグリフィスの東京での様子で、「大学南校で志願して英人語学教師ローバーの組などを通訳づきで一週間（1月23日より30日まで：明治3年12月3日より12月10日まで：）教えた。」と記す。原文は「資料4：グリフィス日記」を参照 注<sup>8</sup>。

<sup>6</sup> 『骨肉』（小村捷治著 2005年鉾脈社刊）所収の小村寿太郎英文自伝（グリフィスコレクションの中のStudent Essays 319編の第28編目の作品。1874年筆。）による。

<sup>7</sup> この二名は1871年1月13日（明治3年11月23日）に暴漢に切られて重傷。

<sup>8</sup> 日記の元データは、福井大学総合図書館サイト：

<http://www.flib.u-fukui.ac.jp/elib/griffis-m/griffis-c/J-5/index.html>

23 monday

Rose at 8 o'clock, studied till 10, Went to the Daigaku Nanko taught Mr. Ropers' class, with help of an interpreter, till 12. Another class, from 2 - 4. Enjoyed the work very much. In the afternoon, took a walk with Magogami and three pupils. Evening, began the Katakana and read Papers & just read by English Mail.

グリフィスが教えた、午前二時間（10時から12時）、午後二時間（2時から4時）は、「大学南校上等正則生日課表」の冬季（10月から3月）の日課に相当するので、この明治3年12月の時点ですでに、少なくとも上等生は正則で授業が行われた可能性がある。

ダラス・リングが重傷で退職の上に病気がちのローバーが欠勤。外国人英語教師7名の中の3名が欠けて、グリフィスは臨時に午前午後も英語の授業を続けた。「ローバーの組」との記述があることは、すでにこのとき、ローバーが直接英語で授業をする組（つまり正則で英語教育を行う組）があったことを示すか。貢進生はすべて正則と定めたが教師が不足しており、増員した外国人語学教師が着任次第に順次上等クラスから正則に移って行ったのではなかろうか。

さらにグリフィスは2月17日（明治3年12月28日）から始まる福井への旅と福井での生活の通訳に、大学南校の英語教師岩淵竜太郎<sup>注9</sup>を雇い入れている。岩淵が通訳に転身した背景に、変則から正則への変更があったか？

### 3：大学南校の英語教師であった高橋是清<sup>注10</sup>の履歴から見ると・・・

※この変則の時期の英語教師の一人に高橋是清がいた。自伝によると明治二年正月開成学校ができたときすぐに入学したが英語が出来ることで三月には教官三等手伝いになったとある。その後大学南校となって後も教師を続けた。しかし明治三年の秋、福井藩出身の生徒の放蕩生活のために出来た借金250両を借金して用立てたことをきっかけにして自らも放蕩生活に陥り、同居していた大学南校教頭フルベッキの家を出て、世話になっていた福井屋数右衛門宅に転がりこみ、その後放蕩がたたって大学南校を辞めざるをえなくなったとある<sup>注11</sup>。

「文部省往復明治4年甲」の470に福井屋に同居する旨の届出書（大学小助教準席 橋和吉郎

9 『ミカドの帝国』（p401）の記述によれば、彼は帝国大学の通訳の一人で、父は下総の佐倉の書道教師で、岩淵自身は函館や他の都市で変化に富む体験をし、イギリス人・アメリカ人・フランス人・ロシア人とも接触したと。

10 高橋是清（1854－1936）。江戸の幕府御用絵師川村家の庶子として生まれ、仙台藩足軽高橋家の養子となる。幼名は和喜次。横浜において英語を学び、慶応3（1867）年仙台藩の留学生として渡米、奴隷に売られるなどの辛酸をなめ、翌明治1（1868）年末帰国、森有礼の学僕となる。この際森の命で橋和吉郎と名乗る。大学南校に入学、次いで教官3等手伝いとなったが放蕩のため辞職。以後多くの職業を経験。後に文部省・農商務省に出仕し、商標登録、発明の専売特許の制度の立案実施に当たり、専売特許局長となる。22年、辞職してペルーの銀山の経営に当たったが失敗して、財産を失い帰国。その後日本銀行に入り、西部支店長・横浜正金銀行支配人・副頭取を経て、32年日本銀行副総裁となる。日露戦争時に大量の借款に成功し、貴族院議員、日銀総裁を経て、大正二年山本内閣蔵相。その後政友会には入り、原内閣の蔵相、原暗殺後は政友会総裁首相となる。

11 『高橋是清自伝 上』（1976年中公新書刊）による。

17歳の名義の届書：橋和吉郎は是清の当時の変名）がある（資料5：「高橋是清（橋和吉郎）の転居願い」参照）がその日付は、明治4年3月22日（1871年5月11日）である。

退職届書の日付は、明治4年5月19日（1871年7月6日）である。

つまり高橋が大学南校を放蕩生活でサボり退職した時期は、南校における英語教育が変則から正則に変わり、英語教育の主役はアメリカ人やイギリス人の教師に代り、高橋ら日本人教師はその助手となった時期の直後ではなかったか。正式にアメリカの学校で学んだわけではなかった高橋の英語力は、会話はともかく、読み書きならネイティブの英米人には大きく劣る。英米人が教師となって主に教えるように学校の体制が変わって高橋が腐りきっていたところに、帰国する越前藩士の借金を肩代わりしたことの御礼としてその藩士と藩御用商人の福井屋から接待を受けたことを切っ掛けにして、高橋は身を持ち崩したのではなかろうか。

明治3年10月以後に貢進生として入学した小村寿太郎や齋藤修一郎らに高橋が英語を教えたのは、この時から明治4年の3月までと思われる。

★大学南校時代の齋藤修一郎：（『懐旧談』 p51による）

入校時、英語は18組中16組、数学は2組。英語は一年足らずで9組に進級

当初住んだのは西周邸。明治4年1月22日（1871年3月12日）にはすでに寄宿舎に移っていた。  
（『文部省往復明治4年乙』533の「貢進舎生名簿」による）

#### G：貢進生間の学力格差が顕在化⇒学制改革の必然化

貢進生 310名の間には元々大きな学力格差があった。選挙基準<sup>12</sup>が曖昧であったから。数年語学教育を受けたものと、全く初めての者との格差も大きく、年齢も16歳から22歳とばらつき、結婚年齢に達していた者の中には日々遊郭に通い詰めて入り浸るなど、生活態度の格差も大きな問題であった。ここに語学教育が完全に正則化されることで、この格差が大きな問題になった（貢進生以外の私費・藩費の学生計660名も） ⇒学校を一度閉校して、学力・生活態度で生徒選別の改革案が出てくる。

② 南校：明治4年7月21日（1871年9月5日）に「大学南校」から⇒「南校」に改名。

明治4年9月25日（1871年11月7日） 大学東校・大学南校一時閉鎖。

※背景には：

明治4年7月14日（1871年8月29日）：廃藩置県断行⇒中央集権国家へ！

明治4年7月18日（1871年9月2日）：大学を廃し文部省を設置⇒教育の中央集権化へ！

これによって従来の漢学・洋学対立が解消され、洋学を旨とした体制へ。

新学制：生徒定員500名、内250人を英学生、125名を仏学生、125名を独学生とする。

すべて正則として外国人教師から直接講義

・明治4年10月27日（1871年12月9日） 学制改革の上、普通科として再開。

※合計970名の学生から470名が学力不足・素行不良を理由に退学が迫られた。

★齋藤は無事南校に残り、英学の第3級に。

<sup>12</sup> 『貢進生選挙心得』には選考基準として、16歳以上20歳まで、秀才であること、行状が正しいこと、身体壮健なことが示され、洋学研究をしたものを選ぶは無論なれど前4項は外せないと規定。従来の藩よりの入舎生から貢進生を選ぶときには、22歳までは可とされた。（『東京帝国大学五十年史』上冊 昭和7年刊 149～151頁 『東京大学百年史 通史1』（1984年刊）p144・145に再録）